

IAIA レポート

初の日中韓ワークショップ開催

東アジアのアセスメント研究者のネットワーク形成に向けて

松本 悟

1. はじめに

日本、中国、韓国の環境アセスメント研究者が参加しての「第1回日中韓ワークショップ」が、2011年10月28日に北京師範大学で開催された。このワークショップは、本学会と韓国環境影響評価学会(KSEIA)が2003年から交互に開催してきた「日韓ワークショップ」を発展させたものである。2010年に名古屋で開催した第5回日韓ワークショップに本学会がゲストとして招聘した中国環境保護省のLi Tianwei氏と北京師範大学のLi Wei氏が今回のワークショップ開催の中心となった。

ワークショップには、ホスト国の中国から北京師範大学のHao Fanghua副学長をはじめ14名、韓国からはKSEIAのKim Myungjin会長をはじめ5名、日本からは本学会の田中章国際交流委員長を含め、同委員会のメンバー5名が参加した。また、北京の在中国日本国大使館の岡崎雄太一等書記官(環境担当)やJICA(国際協力機構)の担当者など日本政府・機関からの積極的な参加があった。

ワークショップでは、各国の代表者がそれぞれ開会の辞を述べ、3カ国のアセスメント研究者の経験と知識の共有の重要性を指摘したあと、参加者による発表に移った。3カ国に拡大したこともあり、ワークショップでの研究発表は13本に及び、前年の倍以上となった。

2. 各報告と議論の概要

今回のワークショップには、「環境影響評価と戦略的環境評価の有効性に関する日本・韓国・中国三者会議」というタイトルが付けられた。発表のテーマは大きく2つに分けることができる。1つはそれぞれの国のアセスメント制度に関わるもので、もう1つは広域または国際的な視点のものである。それぞれについて発表の概要を紹介する。

2.1 EIA/SEAの新たな傾向と課題

■日本のEIA—これまでとこれから

小野 洋, 環境省環境影響審査室

■韓国の低炭素グリーンシティとSEA

Lee Jong Ho, 清州大学

■中国の文脈でのSEAの技術指針の有効性

Bao Cunkuan, 同濟大学

■持続可能な社会創生の社会基盤構造としての環境アセスメント

原科 幸彦, 東京工業大学

■SEAの原油流出事故への適用

Jung Jong Gwan, 忠南発展研究院

■中国の都市計画におけるSEA

Liu Yi, 清華大学

小野氏は、2011年4月の日本の環境影響評価法の改正を歴史的な経緯を含めて分析し、フォローアップ報告、風力発電、災害復興への適用の観点から改定のポイントと課題を明らかにした。

Lee氏は、2010年に韓国政府が導入した「低炭素グリーン成長」とその一環である「低炭素グリーン都市」構想に焦点を当て、計画の諸段階でSEAの積極的な適用の必要性を主張した。

Bao氏は、中国におけるSEAの技術指針の実施状況を研究し、影響評価の結果をいかに意思決定につなげるかが重要であり、そのための法制度の改正ポイントを提示した。

原科氏は、環境アセスメントを持続可能な社会形成の社会的な基盤と位置づけ、そのために経済・社会面での影響も考慮し、透明性と意味ある参加によって意思決定につなげる重要性を指摘した。

Jung氏は、2007年に起きた韓国史上最悪の原油流出事故(Hebei Spirit号事故)後の影響評価を分析し、影響範囲をできるだけ広く取ることや、「災害影響評価」の導入を教訓として導いた。

Liu氏は、毎年1千万人以上が都市に移り住む中

国の現状に対応するため SEA 政策の重要性を説く一方で、その際適用する SIMULAND と ULE_CA という2つの土地利用モデルの課題を分析した。

2.2 EIA/SEA の越境的・地域的な課題

■北東アジアにおける越境環境影響評価

Rhee Deok Gil, 中国環境科学研究院/NIPA

■日中韓自由貿易地域の初期 EIA

Mao Xianqiang, 北京師範大学

■輸出信用機関と環境配慮—日中韓の比較

清水規子, FoE Japan

松本 悟, 一橋大学

■森林エコシステムにおける温暖化ガス評価

Kim Myungjin, 韓国国立環境研究所

■中国の大規模地域 SEA の理論的・実践的経験

Ren Jingming, 中国環境保護省

■韓国における地球温暖化とフェノロジー

Lee Sang Don, 梨花女子大学

■中国の環境保健リスク評価

Cheng Hongguang, 北京大学

Rhee 氏は、日中韓を含む北東アジアの地域的な環境連携の枠組みをレビューした上で、越境環境問題に対応できるような、より拘束力のある環境条約の制定に向けた合意形成の重要性を強調した。

Mao 氏は、日中韓自由貿易協定 (FTA) が成立した場合の中国の環境への負荷を CRAM 手法で試算し、SO₂、粉塵などは減少するが、TN、TP、COD、CO₂ は増加するとの結論を得た。

清水氏と松本氏は、自国企業の海外進出を支援する輸出信用機関の環境社会配慮政策を比較し、

OECD 加盟国の日韓間に透明性で差があることや非加盟の中国の政策課題などを明らかにした。

Kim 氏は、植物の光合成と呼吸によって、昼間は CO₂ の濃度が下がり夜間は増加することを明らかにし、この方法を使って温室効果ガスの吸収と排出を数量化することを提唱した。

Ren 氏は、空間における環境の受容能力と工業化の進展度を SEA の手法を活用して5つの大規模事業で分析し、両者のバランスを考えた工業化再編に必要な検討事項を明らかにした。

Lee 氏は、温暖化の影響を調べるため12の植物の開花時期を調査し、開花時期と温度変化の関係は直線的ではないことを明らかにした上で、地理的条件を考慮した広範な調査の必要性を指摘した。

Cheng 氏は、中国の鉛中毒による健康被害の深刻な状況を調査し、関連産業を監督する行政部署間の連携の悪さや技術的な問題、被害が生じた際の対応の遅さなどの問題点を明らかにした。

3. 所感

3カ国のワークショップになったことで、発表本数が増加し、発表内容も多様化した。特に北東アジア全体を視野に入れた国際的な研究発表が多かったことは顕著な傾向である。また、日本大使館や JICA からの参加者があったことも今後に向けた収穫であった。一方で、丸1日のワークショップに数多くの発表が入ったため、進行はかなり慌しく、それぞれの発表を深く議論したり、発表間のつながりを見出したりする機会がなかったのは残念である。2012年には韓国、2013年には日本での開催が決まっており、一層意義ある場になることを期待したい。

